

平成二十九年 度

博士（文学）学位請求論文 内容及び審査の要旨

河合重好

丹羽文雄研究—宗教小説を中心に—

皇學館大学大学院

博士(文学)学位請求論文内容及び審査の要旨

河合重好氏の学位請求論文「丹羽文雄研究―宗教小説を中心に―」は、自伝性の強い〈生母もの〉といわれる作品系列から、〈宗教もの〉に至る作品群を分析し、丹羽文学に見られる〈人間観〉を機軸に、その文学的特色を明らかにしようとする考察を試みたものである。

本論文は、序章以下、第一章から第六章に分かれたれ、終章では各章の内容の概略が述べられている。さらに附章一、附章二、附章三が添付され、それらは本論文を支える基礎的な役割を担っている。本論文の目次を示せば次のようになる。

*

序章 丹羽文雄の文筆活動と宗教小説への傾斜

第一章 丹羽文雄「生母もの」にみる人間観

―親鸞思想(宿業論)への接近の契機―

第二章 丹羽文雄と浄土真宗

―罪と救済について―

第三章 丹羽文雄の宗教小説への転向とその背景

―その動機と作品「青麥」への反映―

第四章 丹羽文雄「菩提樹」にみる宗教的態度

―宗珠と館の宗教談義をめぐって―

第五章 丹羽文雄「有情」にみる人間観

—父子間の心の断絶から親鸞への傾斜—

第六章 丹羽文雄「親鸞」にみる人間性—長子善鸞との信仰上の交流を中心に—
終章

附章一 丹羽文雄「親鸞」にみる仏教の変遷と相克—そのルーツから鎌倉期まで—

附章二 丹羽文雄と浄土真宗—「浄土真宗もの」にみる罪と救済について—

附章三 先行研究一覧

*

以下、本論文の構成にしたがって、その内容を概説する。

序章は、丹羽文雄の八十年にわたる文筆活動を俯瞰すると、第一期から、第六期に分けられることを説明したものである。第一期「(生母もの) (マダムもの) (昭和七年〜十二年、28歳〜33歳)、第二期「(市井事もの) (戦記もの) (昭和十年〜二十年、31歳〜41歳)、第三期「(生母もの) (風俗もの) (マダムもの) (昭和二十一年〜三十一年、42歳〜52歳)、第四期「(実験小説) (昭和二十五年〜二十七年、46歳から48歳)、第五期「(風俗小説) からの脱皮」 (昭和二十八年〜昭和四十一年、49歳〜62歳)、第六期「(浄土真宗もの) (昭和四十年〜五十六年、61歳〜77歳)。

第一章では、作家丹羽文雄の「(生母)」と「(作品)」との関係を考察し、それが丹羽文学の起点であることを論じた。世間並みの母親であつてほしいと願う丹羽の心情とは裏腹に、不条理な生き方をする生母の存在が、その作品群の基層にあり、従つて「生母もの」と言われる作品群は、非常に自伝性の強いものとなつてゐることを確かめた。

このことは、丹羽自身が、随筆「亡き母への感謝」で、「生母ものといわれているものは、まちがいなしに母をモデルにしたもの

である」と述べ、「一見して主人公（息子）が作者自身であることが判るように書いた」と語っていることから裏付けることができる。

ここでは、丹羽文雄の〈生母〉の生き方を主題とした「生母もの」に焦点をあて、その対象として、青年期の作品「秋」（大正十五年）と壮年期の「母の日」（昭和二十八年）を採り上げ比較考察を試みた。両作品の発表年代には、約三十年の開きがあり、双方の間には、丹羽の生母に対する感情の変化をみることができる。

青年期の「秋」には、生母の傍若無人な〈悪人ぶり〉が描かれ、息子・敬七には生母への嫌悪感・排除感が描写の中心にあり、宗教的描写は全く見られない。しかし、壮年期の「母の日」では、はじめて親鸞思想の「宿業論」に通じる描写が見られ、生母の生き方を同情的、擁護的にながめる境地に到達できたことが分かる。「母の日」において、鈴鹿は「長年の生母の不条理な生き方から受ける苦悶からの解放と救いが得られた」と述べているのである。これは、丹羽自身が、親鸞の「宿業」思想の理解に至ったことを暗示しているのではなからうか。ここに、後に親鸞思想に傾斜する丹羽文学の濫觴をみることができる。

第二章では、丹羽の本格的な宗教小説である「浄土真宗もの」といわれる六作品（「青麥」、「菩提樹」、「有情」、「一路」、「肉親賦」、「無慚無愧」）を対象に、この中に描かれている登場人物の男女の愛欲を主題とした倫理的（道徳的）な罪やその背景について、作品間の類似性や差異性を分析するとともに、作品の随所にみられる親鸞の「罪の救済」についての宗教的教義（浄土真宗の根本思想である他力本願）がどのように引用されているかを明確にすることによって、親鸞思想と作者の宗教観との関係を明らかにすることを目的に考察を試みた。

その結果、類似性に関しては、これらの作品は、養子に入った実父と祖母との間に生じたとされる不倫問題と関連があり、いずれも、住職の家庭やその延長上での人間模様を扱っており、全作品のモチーフに共通するものがあることを確認することができた。

また、差異性に関しては、作品への宗教教義の引用数にかなりの濃淡があり、最も多い「菩提樹」から、全く引用の事実が見られない「肉親賦」まで幅が広い。さらに、念仏による救済に関しても、肯定的な作品「無慚無愧」や、懐疑的な作品「菩提樹」の

存在を確認することができた。従って、発表年代の違いにより丹羽の宗教観が推移したことを伺い知ることができる。

第三章では、宗教小説への転向後の第一作である「青麥」を対象に、丹羽が作品中に描写している転向へのきっかけや登場人物に対して親鸞思想をどのように引用しているかを検証したものである。

その結果、先ず転向に関しては、長年の文筆活動の末、遭遇した行き詰まりに対し、その血路を開いたのが、目に見えない世界である「親鸞思想」への覚醒だとする自覚があり、その視点にたつことによつて、「宗教小説」への転向の道が開け、文筆活動の挫折から立ち直ることができたという作家の転向経緯がわかった。

また、宗教教義に関しては、先に述べた第一章「生母もの」では、生母の生き方に対して、歎異抄・十三章の「業縁」の文言が作品中に一個所、全文引用の形で描写されているのに比べ、「青麥」では、念仏を唱えながらも、情欲から離脱できない如哉の煩悶に対して、「一念多念証文」の「大悲ものうきことなくして、常にわがみをてらす」といった仏眼や、「口伝鈔」の文言、「末燈鈔」の自然法爾といった親鸞思想の教義を随所に引用し、宗教小説への本格的な移行を示すものとなっている。

第四章では、「青麥」に次ぐ作品「菩提樹」を対象に、この時期における親鸞思想に対する作者の心的背景や信心に対する立場を、住職である宗珠と檀家の館との談義から判読することを目的とした。

この作品は、丹羽の宗教小説としては、創成期にあたるものであるが、両者の談義には、「宗教的真理」と「科学的真理」との相違、唯心論、唯物論等に関する対話が描写され、ここには親鸞思想への帰依がいかに容易でなく、困難を極めるかについての訴えがある。これらの作品の考察から、この時期の丹羽文学は、浄土真宗に対して強い関心を抱いてはいるものの、唯心的な立場から宗教を論じておらず、唯物論者としての立場からの作品であることを知ることができた。

第五章では、「有情」は、丹羽文雄の長男直樹の国際結婚を題材に発表されたものであり、特に自伝性の強い作品である。その文

脈は、結婚に反対する父母と結婚を切望する息子との心の断絶と対決をきっかけとして、人間のあやまちとその苦しみからの解放、心に負い目をもつことの危険性を論じたものである。

親子は、最後まで和解することなく、平行線を辿るが、父は、このことが契機となつて、はじめて、相手の気持を察することの困難さに直面し、かつて自分が三十年前、僧職になる約束を破り、小説家になつたときの、父や檀家に与えたであろう背信の重さに気づく。そして、親鸞思想に覚醒することにより、煩惱具足の人間が犯す「あやまち」からの心の解放と救いを求める姿が描写されている。

ここには、現代社会に生きる人間にとって、円滑な人間関係を維持していくために必要な警鐘や教訓が内包されている。

第六章では、作品「親鸞」については、丹羽自身が、「この作品は親鸞の人間性を追求することを主眼としたものである」と語っているように、歎異抄で述べる「万人平等の人間観」や「師に対する絶対帰依」といった親鸞の人間性が前段において描写され、さらに、後段において、父子間の人間交流を中心に、そこに展開される親鸞、善鸞そして東国の門徒たちの三者間の信仰上の葛藤や苦悩が描かれる。ここには、親鸞からの真宗伝授を強く望みながらも、教化が進むにつれ、求道姿勢の違いや、すでに、密教思想に染まっていたことなどが災いし、善鸞は、親鸞思想への帰依には、どうすることもできない溝のあることを自覚せざるを得なくなり、次第に、批判的な立場に傾き、離反してゆく。このような善鸞の心の軌跡が綴られ、ついには、義絶の運命を辿らざるをえなかった親子の姿が描かれている。

終章は、第一章から第六章の内容を整理したものであり、その内容は、既述した内容と重複するので、ここでは省略する。

附章一は、作品「親鸞」に書き込まれた親鸞思想の変遷や、他宗派との相克についての具体的な記述がある点に論者は着目し、その内容を整理したものである。そして丹羽文雄自身が、このような勉学の成果を作品「親鸞」に活かした点を、論者は強調して

いる。

附章二は、修士論文を添付したものである。「青麥」（昭和二十八年）「二路」（昭和三十七年）を対象に、作中の宗教的表現の頻度を調査したものである。これらの論文は、後の【講評】に紹介するように、加筆修正を施して、既に学会誌等に掲載され、博士論文の基幹となったものである。

附章三は、丹羽文雄の主な先行研究文献を刊行の年次順に紹介し、内容の要約、解題を付したものである。なお、序章から終章までを、博士論文審査の対象とし、附章は、審査の参考として扱った。

【講評】

本論文は、丹羽文雄の所謂（生母もの）を濫觴とする文学が、やがて晩年の大作「親鸞」へと注ぎ込む変容の軌跡を、代表的な作品の読みを通して検討したものである。（生母もの）から所謂（宗教小説）へと転じる丹羽文学の流れを、宗教的教義を援用しながら俯瞰して論じた。その試みは、広汎多岐にわたる丹羽文学を、その「人間観」を機軸に俯瞰したもので画期的な労作といえる。これまでの河合氏の業績の一端は、既に何編かは学術雑誌に掲載された。

それらは、第一章「丹羽文雄「生母もの」にみる人間観」（『解釈』第六十三卷一・二号、平成二十九年二月一日発行）、第二章「丹羽文雄と浄土真宗」（『皇學館論叢』第四十六卷第三号、平成二十五年六月十日発行）、第三章「丹羽文雄の宗教小説への転向とその背景」（『皇學館論叢』第四十九卷第一号、平成二十八年二月十日発行）、第四章「丹羽文雄「菩提樹」にみる宗教的態度」（『皇學館論叢』第四十七卷第三号、平成二十六年六月十日発行）、第五章「丹羽文雄「有情」にみる人間観」（『皇學館論叢』第五十卷第二号、平成二十九年四月十日発行）の五編であり（副題省略）、総て本論文中に収録された。

総じて、本論文の特色は、丹羽文学に流れる「人間観」に着目し、その形成される経緯と世界とを、生涯にわたる作品群を対象として考証した点にある。第一章では、（生母）の生き方の中に、作家自身が親鸞の（宿業論）に通じる萌芽を見出していること、また第五章では、結婚に反対する父母と息子の心の断絶を契機に、人間の苦悩とその解放を描き、作家みずからが体験した心の負

い目を論者は指摘する。つまり、周囲の期待を裏切り、寺籍から逃避した作家自身の贖罪がこの作品に投影していることを発見した。その間に置かれた第三章、第四章では、初期から後半への作品世界の変容を、時系列的に確かめている。

第六章に置かれた作品「親鸞」にみる「人間性」の考察は、未発表ながら本論文の集約となるべきものである。論者は、まず作品「親鸞」の前段に描かれる①人間性を否定する戒律への反発②万人平等の人間観③師・法然に対する親鸞の絶対帰依の描写に注目した。そして、作品の後段に詳述される長子・善鸞と親鸞との確執と義絶に着目した論者は、ここに人間親鸞の苦悩を指摘する。つまり、丹羽文雄は宗教者としての親鸞ではなく、現代人にも通じる親鸞の生身の現実を描写した。そこに、親鸞を通した丹羽文雄の「人間観」が描かれているというものである。

本論文は、これまでの風俗小説作家としての丹羽文雄の一般的な評価に対して、現代日本文学における宗教小説の大成者としての価値を付与したものである。論の重複や誤植、冗長な説明の箇所等も見られるが、総合的に判断して、博士(文学)論文に値するものと認められる。

以上

学位請求論文最終試験報告書

河合重好

右の者について、学位請求論文に関する審査及び最終試験を行い、その結果審査に合格したものであることを認める。

平成三十年三月三日

審査委員 主査 半田 美永

(本学教授)



副査 大島 信生

(本学教授)



副査 松本

(本学教授)

